

bunka@ryukyushimpo.co.jp
TEL 098-865-5162

考

倍元首相 琉撃1年



こと歌ったかもしれな
い。
バブル崩壊直前の異様な

メディア批判の変遷

年代	対メディア感情	象徴的なワード
1970	疑問	紙上裁判
1980	批判	報道と人権
1990	不信	報道被害者
2000	否定	マスゴミ
2010	不要	フェイクニュース
2020	排斥(無視)	生成AI?

6月発生の大学生殺害事件に際し、遺族からコメントが発表された。「誤った情報がまじりやかに報道されていること／悪意のある情報操作／私たちの住まはもろろのこと／きなの祖父宅にまで押しかける報道陣のモラルのなさ／このまことに疑問を感じています」との悲痛な叫びだ。なほ、変わらぬのか—事件・事故が起ころたび、報道批判が巻き起る。その結果、メディアの信頼性は低下し、ジャーナリズムあるいはジャーナリストに対する社会的な

時評

(7月)

山田健太

地位も下落、市民からのスベクトは薄まってくる。それは、社会にとってどのような意味を持つのか。

端緒は犯人視

メディア批判の系譜は別表のようによまめることができよう。1970年代から表面化するようになった批判の対象は当初、もっぱら事件・事故報道だった。最初の紙上裁判(ペーパー・トリアル)は、新聞がまた社会的影響力が強いマスメディアだった時代のことであるが、被害者の犯人視報道が主として刑事弁護をする法曹関係者から問題提起されたものだ。

80年代に入ると『フォークス』をはじめとするFETと呼ばれる写真週刊誌が登場、ほぼ時期を同じくして小型テレビカメラの開発や中継技術の向上により、まさにテレビが一場「場」に入る時代になった。記者会見場にも事件や事故の現場にも、ステールだけでなくムービーカメラの

放映が生まれる時代の始まりだ。そうしたなかでの激しい取材合戦の結果、従来とは質量ともに異なるスーパーリアル報道が発生する。その結果、基本的な人権の中核的権利であったはずの報道の自由が、人権と対抗的な関係として捉えられるようになった。報道界も対応策を講ずることを迫られ、それまでの被疑者呼ば捨て

が、オウム真理教事件などを契機に90年代には政治問題化し、法規制の動きもあつた。これらに対し報道界は過激な取材向けにメディアスクラム対応、放送については現在のBPO放送倫理・番組向上機構を設置、人権侵害の救済と防止に関し目に見える対策を打ち出した。戦後すぐに来た新聞倫理綱領が、

になる。その流れは、10年代になってSNSが広がり、情報量が飛躍的に増大することと反比例して、インターネットと称されるような、格差する情報環境を主とするようになる。

実際はアルゴリズム等で見えざる情報コントロールを受けつつも、逆に見える形の価値づけを行う新聞やテレビといったマスメディアを意味嫌いの状況が、より一層強まっているのが現

と人権意識の高まりのなかで必然的に進んできたといえる。それまで、なおまじりにされてきた存在であっただけに、まじり社会の制度が追いついてきた結果でもある。しかし同時に、こうした変化に対する強い忌避感、社会全体を匿名社会化し、責任が曖昧になったり事実が水面下に隠れ、正義が実現しづらい事態にも繋がっている。

さらに、報ずる側の「努力不足」も上乗せされてい

匿名だ。おぼろしく言えば、発言に全く責任を取らなくてよい情報で世の中が溢れかえっているわけである。

先にあえてリンクと書いたが、実際には取材先との厚い信頼関係の下で、まじりや情報を入し報道に至っている事実があると推察する。公職員としての守秘義務に反し、いわば形式的な違法行為を犯してまで情報を伝えている警察と、聞き出すための努力を惜しまない記者との関係性は理解はできる。

見える化の努力

しかし美態として、警察が自身に不利な情報を出すことは考えづらい。その結果、警察に落ち度はなく犯罪に巻き込まれたのは本人・家族の対応のせいという構図が作られる可能性を否定できない。そうした情報の偏りを補うのが、周辺情報への聞き込みであったりするわけだが、こうしたいわゆるローワー作戦的な関係者や周辺住民への聞き込みは、事件が起るたびに批判の対象であるものの、圧倒的な情報量を有する警察に對抗して、事実を迫るための手段としてなお有効だ。

ただし問題は、その時のメディアの姿勢である。被害者の過失を暴くかの如くの覗き見の気持ちで封印し、警察の情報隠蔽を見破るための情報収集であるとの立ち位置を明確にする必要がある。同時に、メディアの信頼性を高めるために、伝える側の「極み」も言明する。公職員としての守秘義務に反し、いわば形式的な違法行為を犯してまで情報を伝えている警察と、聞き出すための努力を惜しまない記者との関係性は理解はできる。

捜査情報も住民証言も情報を明示する姿勢を徹底してこそ、被害当事者が世間に知られたくないことであつても、社会に伝える公益性や公衆性が明らかに優先するとして、あえて報じるジャーナリズムの社会的役割が理解されるのだと思う。実名報道を主張する報道機関自身が、率先して匿名化を選択している矛盾や欺瞞を、読者・視聴者は見抜いているといえるのではないかと。送り手と受け手の間にしっかりと信頼感があれば、被害者とりわけ遺族も、犠牲者の存在を記録し、事件・事故を解明するジャーナリズムの活動を支持してくれるはずだ。

(専修大学教授・言論誌) (第2土曜掲載)

被害者取材・報道

匿名社会 責任曖昧に 監視機能は信頼感が前提

報道を改め「登壇者」呼称をつけたり、新聞各社が外部有識者によって構成される紙面審査会を新設することになる。また出版界でも雑認人権ボツクスを設置、ダイヤへの信頼性はその後、さらに崩壊を続けることになる。とりわけ200年代に入りインターネットが定着、情報の入手も発信も多様化する中で、いわば情報を「独占」してきた既存マスメディアへの風当たりはますます強まること

現代状況に合わせて全面改訂もされた。

情報の多様化

しかしつたん崩れたメディアへの信頼性はその後、さらに崩壊を続けることになる。とりわけ200年代に入りインターネットが定着、情報の入手も発信も多様化する中で、いわば情報を「独占」してきた既存マスメディアへの風当たりはますます強まること

在進行形の話だ。さらに新聞やテレビに日常的に接していない層で、偏回批判をほじめとするマスメディアの信頼感が崩れる傾向が強いとされる。

そうしたなかで、古典的な匿名報道批判に加え、被害者の実名を始めるようになった。これは、200年代に入ってから被害者保護法制も含めた環境整備

も。2000年ごろまで、報道は見える形での改善策を打ち出してきただけの、それ以降で被害者の人権を守るための施策としてどのようなものがあるのか。一方で、紙面や番組での「匿名」はほとんど進んだ状況だ。たとえば冒頭の大學生殺害事件においても、警察から「リンク」される情報は、もっぱら捜査関係者という言葉で括られるし、友人の証言は例外なく

の
な
ん
が
重
な
る
勝
ら
ん

す
ま
じ
ら
な
け
れ
ば
、
す
ま
じ
ら
な
け
れ
ば
、
す
ま
じ
ら
な
け
れ
ば

わたしたちはおも
うみずとられ、
ひかりにおぼれ
いまつきのほろほ
だからあいにい
きまらぬ、くだ
そんなきまらぬ
そしてきらぬ
まじらぬ、を
あいらぬこと
だれにでもゆる
だからほおつてお
びやりとしたお
そのそのいたお
なれしきまらぬ
わたしのきまらぬ
あえなくて、あ
いつてくれている
ねえわたしたち
とあなたになれる
こんなきまらぬ
あいらぬきまらぬ
はのまりしきらぬ

く
ら
う
で

の
評
寸

られた人生相談と、その回答をまとめた本書。いいことを言っておまそ、というふうな書き込みが全くないのが弊だ。「自分と無関係な他人の怒りに反応してしまう」という相談に対して「敏感な

新刊紹介

オンライン上の人生相談と回答「おれに聞くの？」(山澤人著)

にも積み重なった問題を解きほぐし、先人見なく解明することは、この社会全体の責務だ。(翻訳家) × × 安倍晋三首相銃撃から1年。事件が映し出す日本社会の今を二人の識者がそ

世間の風潮に流されることなく、堅実なキャリアを求め、躍進を続けていた。ところが、母は自己破産しており、兄妹の窮乏が伝わる中、自殺未遂をし、自衛隊をなんと志願部隊へ帰郷した20代半ばの被害は、

いけだ・かよこ 1948年東京都生まれ。翻訳に「夜と霧」など。山田健太著書のものとして「山田健太と白木」の「失われた30年」を3月に刊行した。退職という働き方はもう古が1つだった。若者が正しい、これからは自分のやりたいことを中心にその都度「自分を発見」すること